

令和2年度 生活科実践・研究計画

部 員 ○稲垣 勇介, (福田 佳子)

研究テーマ

対象に主体的に関わり続けながら、
気付きを深めていく子どもを育む学び

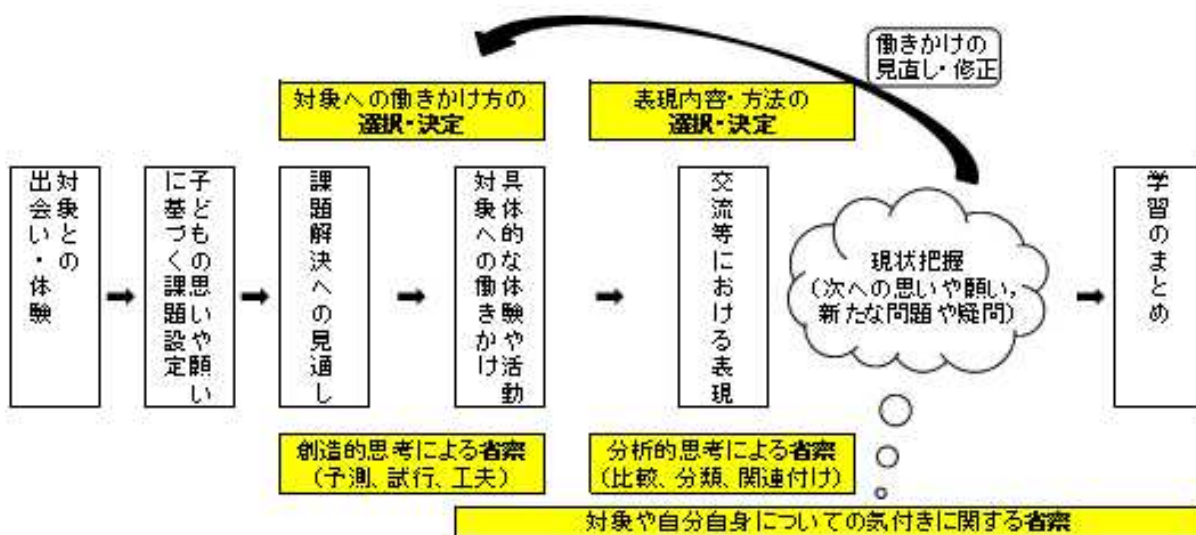
1 研究テーマについて

生活科では、2年次の研究において、子どもの思いや願いに基づいて必然性のある学習活動を展開し、単位時間の中に省察の活動を繰り返し位置付けたことにより、次の活動や行動への見通しや筋道を創り出し、自らが選択した対象に、よりよく関わろうとする意欲を高める姿につながることを確かめることができた。また、一人一人が自分事として友達の困り事に真剣に向き合いながら解決方法を調べたり、よりよい方法を試したりする場を設定したことにより、豊かな体験活動へとつなげることができた。一方で、思いや願いを大切にしながら、自ら追究していく子どもを育てる単元構成の在り方には課題が残った。

これらを踏まえ、3年次も「対象に主体的に関わり続けながら、気付きを深めていく子どもを育む学び」の研究テーマを継続し、研究を積み重ねていく。「対象に主体的に関わり続ける」とは、自分の思いや願いの実現に向けて、自分なりの方法で試行錯誤を重ねながら繰り返し対象に働きかけていくことと考える。また、「気付きを深めていく」とは、対象へ働きかけていく中で、対象について以前よりも詳しくなったり、対象との関係がより深まった自分自身に気付いたりしていくことと考える。

生活科では、研究主題の「自律した学習者」を、自分なりの思いや願いをもって対象に主体的に関わり続けながら、対象や自分自身への気付きを深めている姿と捉える。また、研究副題の「学びをつなぐ」ことを、友達と互いの気付きを交流することを通して、次の活動への思いや願いを新たにもっている姿と捉える。「小学校学習指導要領解説 生活編」において「気付きは次の自発的な活動を誘発するものとなる。」と示されているように、子どもは、友達の気付きにふれることで自分の気付きを見つめ直す。それによって対象に対する新たな気付きや疑問が子どもの中から生まれてくる。それは、次の活動への思いや願いとなり、子どもの主体的な活動の原動力となるものである。

生活科における自律した学習者を育てる学習のプロセスを以下のように考える。



生活科で目指す「学びをつなぎ、資質・能力を高めていく子どもの姿」とは次のようなものである。

- ・自分の活動や対象との関係を見つめ直し、そこから次の活動や体験への思いや願いを新たにもっている姿
- ・自分の思いや願いを基に、活動の目標や目的を明確にもちながら対象に向き合おうとしている姿
- ・自分と友達の気付きを比べたり、関連付けたりすることを通して、自分の気付きをさらに深めようとしている姿

2 研究の重点

(1) 自らの思いや願いを基に、対象や対象への働きかけ方を選択・決定できる単元構成の工夫

主体的に考え判断しながら対象について追究を続けていく子どもを育むためには、子どもが思いや願いをもち、その実現に向け、自ら対象に繰り返し働きかけていこうとする意欲が高まるような学習活動を展開していくことが必要である。

単元の導入では、子どもの「やってみたい」「知りたい」「できるようになりたい」という思いや願いを引き出せるように、対象との出会いの場を充実させる。引き出した思いや願いに寄り添い、子どもの気付きや疑問を取り上げながら対象への働きかけ方について選択することができるようにすることで、意欲をもって学習活動を始められるであろう。

単元の中盤では、試行錯誤しながら対象に繰り返し働きかける活動を通して、自らの対象との関わりを見つめ、気付きや学びの質を高めていくことができるように、仲間との交流の場を設定する。仲間との交流を通して、対象への働きかけ方を見直し、よりよい追究の方法を探り、適宜修正を図ることができるようにする。

活動の成果を発表し合う場面では、言葉や絵などの多様な方法によって表現し合うことで、自分だけでは気付くことができなかった新たな気付きが生まれたり様々な気付きが関連付けられたりし、気付きの質の高まりを感じられるであろう。

これにより、子ども自身が対象に働きかけることへの価値を見出すことが期待でき、単元を通して対象を追究し続けていく子どもの姿につながると考える。

(2) 身近な生活に関わる「見方・考え方」を生かし、関わる対象と自分の現状を把握した上で、気付きの質を高めていける省察の場の充実

対象に主体的に働きかけ追究を続ける学びを展開するに当たって、子ども自身が課題解決に向けての現状を把握した上で、対象への働きかけの見通しをもっていることが大切であると考えられる。

子どもが自らの対象への働きかけについて省察して現状把握をすることができるように、教師は個々の課題解決の現状を見取り、適切な問いかけや問い返しを行う。また、ICT機器の活用や自他の比較ができる交流の場を設定をして子ども自身の省察による現状把握を支援していく。

自らの気付きを友達と比べたり関連付けたりする交流の場を設定するが、その中で気付きの質を高めていくためには、子ども自身が交流をすることに必要感をもって取り組まなければならない。そのために、「行為→省察→交流→省察→行為」というサイクルの中で、子どもから生じる困り事や願いを意図的に取り上げ共有した後交流の場を設定する。それにより、友達の困り事や願いを解決するために主体性のある交流が展開されるであろう。再度、取り組む中で生まれた新たな気付きや疑問の発信を求め、自然発生的に生じる子ども同士での省察も大切にしながら、子どもの必要感に応じて交流の場を繰り返し設定していく。

これにより、子どもは活動で得た気付きを自覚的に用い、対象への次の働きかけについての見通しをもち、気付きの質を高めながら自らの学びをつないでいくことができることを期待する。

3 研究・研修計画

時 期	主な研究・研修行事	研究・研修内容
1 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・教科部会 ・附属小学校公開研究協議会（中止） 提案授業 ・附属幼稚園公開研究協議会（中止） 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践・研究計画の検討 ・授業づくり，授業力向上 ・授業を通して重点事項の検証
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・研究パンフレット執筆 ・教科部会 ・実践発表（10/27） ・幼小連携相互乗り入れ授業 ・附属幼稚園公開研究協議会（中止） 	<ul style="list-style-type: none"> ・実践・研究のまとめ ・実践・研究計画の修正 ・子どもの見取り，子どもも理解，授業を通して研究の方向性を確認 ・授業づくり，授業力向上
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> ・教科部会 	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性の確認 ・実践・研究計画の立案

通年：年間指導計画及び資質・能力表の加除・修正